

平成13年度厚生科学研究費補助金（H13-障害-011）  
実績報告書

研究課題

ひきこもり等の精神問題に対する精神的なアプローチに関する研究：動物介在療法及び音楽療法の臨床的な応用

主任研究者	赤堀	文昭	（麻布大学 獣医学部）
分担研究者	岩橋	和彦	（麻布大学 健康管理センター）
	中村	和彦	（麻布大学 獣医学部）
	青木	憲雄	（那珂動物病院）
	小方	宗次	（麻布大学 獣医学部）
	坪井	康次	（東邦大学 医学部）

## 目次

1. アニマル・アシステッド・セラピーに対する精神患者の意識調査 …… 3
2. アスペルガー症候群に対する動物介在療法 (Animal-Assisted Therapy) について …… 7
3. 不登校児童における音楽療法 ……10

## 1. アニマル・アシステッド・セラピーに対する精神疾患者の意識調査

【分担研究者】岩橋和彦、中村和彦

【緒言】アニマル・アシステッド・セラピー(Animal Assisted Therapy以下AATと略す)には生理的効果、心理学的効果、社会的利点があり、これらが無理なく出現する。特に自発性の少ない分裂病の欠陥・固定患者、痴呆患者に有効であるとされている。しかしわが国では、回数・対象患者・動物の種類などの方法論は未確立であり、十分な準備に基づきその体制を確立させて導入している医療機関は少ない。

そこで今回われわれは、精神科に入院・通院中の患者にアンケート調査を実施し、治療を受ける側が動物およびAATに対してどのような意識を持っているのかを探るとともに、我が国での実態に即したAATを確立するための予備調査結果としてこれを本研究にまとめ報告する。

### 【研究対象および研究方法】

#### 1. 対象

単科精神病院4、総合病院精神科1における入院患者311名及び通院患者119名を母集団とし、全員がICD-10によってF0～F4の診断が確定されている。調査対象は14歳～78歳の、男性244名・女性182名・不明(回答なし)4名で、隔離処遇が必要とされる重症例は除外した。

#### 2. アンケートの作成

表のような16の調査項目からなる質問に無記名で記入するかたちをとった。

#### 3. 実際のアンケート調査

2001年9月から同年10月にかけて上記医療機関で各患者にアンケート用紙を配布し、各自で記入してもらった。質問事項に関して不明な点があった場合は職員が説明を加えた。

### 【結果】

#### 1. アンケート協力患者の背景

回答者は全部で430名、性別は男性が60%近くを占め、平均年齢は51歳で、5年以上の長期治療歴を有するものが60.9%、入院患者が72.3%を占めた。疾患別では精神分裂病が74.4%、次いでアルコール精神病7.4%、神経症6.3%、感情障害4.1%、その他7.3%であった。

#### 2. 動物の好き嫌い、飼育経験

「動物が好き」との回答が355名(82.6%)で、「飼育経験がある」のは359名(83.5%)にもものぼった。そのうち大半に支持されているのは犬(278名、64.7%)と猫(177名、41.2%)であったが、猫は嫌いという回答も多かった(103名、24.0%)。また、「訓練

された動物がいい」と答えた人は282名(65.6%)にのぼった。好きな動物を尋ねた質問2で得られた自由回答の中には、ウサギやハムスターといった小動物や金魚という答えが複数あった。どれもわれわれの身近に見られる種類である。

### 3. 動物とのふれあいが病気に及ぼす影響

質問5~7の結果によると、「動物とのふれあいに肯定的で、かつそうしたい」と考えている人が55.8%を占め、そうすることで「気分転換および治療に有効である」と考える人も76.0%および47.7%にのぼった。しかし一方で、動物とふれあうことに対して、気分転換および治療効果に対する期待度双方において否定的・拒絶的な人が22.1%および16.5%みられた。

### 4. 動物とどこでどのようにふれあうか

さらに、病棟内に動物を入れることに対する反応では、「たとえ好きな動物であっても院内に入ってきたらいやだ」とする人が45.3%、逆に「いやではない」とする人は51.6%と、肯定的な意見がやや優勢であった。訓練された動物の方がいいと答えた人は65.6%で、訓練されていない動物でも構わないとする29.5%を上回った。

### 5. 動物がかawaiiそうか

動物を使役することに対する感情では、動物がかawaiiそうだとする回答(157名、36.5%)と問題ないとする回答(153名、35.6%)がほぼ同率であったが、わからないとした回答(114名、26.5%)も多くみられた。

### 6. ロボット犬について

アイボは173名(40.2%)に認知されており、また174名(40.5%)が「ロボット犬とのふれあいは気分転換になる」と考えている。しかし半数以上はロボット犬の存在を知らず、「ロボット犬では気分転換になると思わない」、「わからない」とした人は246名(57.2%)にのぼった。

## 【考察】

動物とふれあうことによってクライアントの心が癒され、ひきこもりにある人達の社会復帰の一助にもなると考えられているAATは、欧米では1970年代以降研究・実践が進み、社会的にも受け入れられすでに制度化されているが、日本では未だその途中である。国内では獣医師がボランティアの飼い主を募り、動物を連れて施設や病院を月に何回か訪問するということが行われている程度である。

そもそもこのAATとは、動物介在療法士が動物とふれあう場を患者、ここではひきこもりの子供あるいは精神分裂病の慢性期の陰性症状(意欲の低下、感情鈍麻、ひきこもり等)を呈する患者に提供するものである。動物とのふれあいを定期的に繰り返していくうちに患者の自発性を誘導し、社会に進出または復帰する一助となるとみられている。例えば病棟にハムスターのケージを置いたところ病室にひきこもっていた患者がでてきた等の報告がある。さらには痴呆老人のリハビリ、うつ病や神経症圏内の患者の症状(不安、焦燥、抑うつ等)の軽減にも有効ではないかとの

指摘もある。

日本の精神病院では昔から家畜作業が行われ、近年まで農耕や園芸と並ぶ作業療法の重要な種目であった。その後、日本の病院精神医療と作業療法の考え方の転換に伴って、家畜作業は小動物飼育に形を変え、現代的な意義を持ちつつけている。こうしたことからAATは精神科領域において有効な治療法のひとつになりうる。実際立川病院では1994年から全国にさきがけて精神科領域にAATを導入している。

また、アニマル・アシステッド・セラピーという呼称であるが、欧米ではAAA (animal assisted activity; 動物介在活動) とAAT (animal assisted therapy; 動物介在療法) とにはっきり呼び分けられているのに対して、日本国内ではその双方の意味を含んだ曖昧な呼称として「アニマルセラピー」が用いられている。このことから国内での体制が未確立であることがわかる。ちなみにAAAとは単に人と動物が触れ合うことに目的があるが、一方のAATは専門家の治療計画のもとに目的を持って動物を使役するというものである。本研究で用いたアニマル・アシステッド・セラピーという語は精神科における治療的側面から、後者を意味するものである。

#### 1. AATへの期待と支持されている動物

今回のアンケート結果から、約半数の人がAATやAAAに対して期待を寄せている。またもっとも支持されている動物は犬であった。犬がわれわれ日本人にとってなじみ深い動物であること、猫と違って従順で訓練しやすいことを考えあわせると、治療に用いる動物は犬の方がより好ましいであろう。また、病棟という限られたスペースではイルカや馬などの大型動物よりも扱いやすいという利点もある。ただし約半数が病棟に動物を入れることに対して否定的であった。治療・生活の場である院内に動物を入れることは不潔であるとの意識がはたらくせいであると考えられる。

#### 2. 治療に動物を用いることへの抵抗感

動物を人間の治療に用いることはかわいそうだという回答はわからないとする回答と併せると60%に達した。これは歴史的に見て、西欧諸国のような動物を使役する慣習がわが国に少なかったこと、つまり身近な動物といえば愛玩動物であり、使役の経験が少ないといった日本人の動物観と関係があるのかもしれない。しかし「動物がかわいそう」とする人のうち、20%は「動物と触れ合うことで病気が良くなると思う」としており、ここでもAATに対する期待がうかがえる。

#### 3. 人畜共通感染症

AATにおいてもっとも注意しなければならないことは人畜共通感染症である。細菌・ウイルス・真菌・原虫・リケッチア・クラミジアなど今日世界で知られているものは200種類以上にもものぼる。入院・通院患者の中には体力・抵抗力が通常時より落ちた者もいるため、細心の注意を払わねばならない。人畜共通感染症を未然に防ぐためには、獣医師等の専門家に管理飼育された動物を用いる必要がある。AATを

行う場所の広狭・介在動物の管理スペースの問題を考えれば犬や猫などの比較的小型の動物が適している。

#### 4. 動物の訓練度に関する問題

現在日本国内でAATに使役する目的で動物を訓練している施設はほとんどない。盲導犬や聴導犬の訓練と違って、使役の目的であるAAT自体が未確立の状態であるため、訓練施設があってもまだ研究段階である。訓練度の標準規格等、整備が待たれる。専門家による衛生管理・飼育管理が徹底され、訓練された安全な動物であるということが認知されれば、病棟に動物を入れることに対する抵抗感を患者から取り除く一助となるであろう。

また、使役する動物への配慮も必要である。動物の受けるストレスの徴候を察知し、必要以上の負担をかけないようにしなければならない。

#### 5. ロボット犬について

ところで、今回われわれは新しい試みとしてアンケート中でロボット犬に関する質問を設けた。ロボット犬の認知度およびAATへの期待度はともに40%にのぼる。ロボットであれば人畜共通感染症の心配は皆無であり、これも選択肢のひとつに加えてよいのではないだろうか。

#### 【まとめ】

アンケートの回答より明らかになったことは、AATを受けてみたいと考えている患者側のニーズがわれわれの予想以上に高いということである。今回のアンケート結果については、現時点でAATを受けていない患者を対象とした調査であるため、当然「わからない」とする回答や無回答も多かった。それでも、AATに対する期待や関心の高さをうかがいしることができる。

精神科に入院中の非急性期の患者さんに限って言えば、薬物療法・作業療法・精神療法・SSTなど治療法はそう多くはない。また食事・入浴・作業療法・その他の日課を除けば日中の時間を持て余す人は多く、その生活は単調である。このことから、今後、条件を整えて犬等の動物やロボット動物などによるAATを導入する意義は十分あるといえる。なお、今回の調査は予備調査であり、この結果をふまえたうえで次回はさらに質問項目を整理して本調査を行い、因子分析を実施し、信頼性・妥当性の検討を行う予定である。

## 2. アスペルガー症候群に対する動物介在療法 (Animal-Assisted Therapy) について

【分担研究者】 中村和彦、岩橋和彦、青木憲雄、小方宗次、赤堀文昭

【緒言】 イヌを用いたひきこもりや不登校を伴うアスペルガー症候群に対する、動物介在療法 (Animal-Assisted Therapy) を行なった。アスペルガー症候群は、対人的相互作用の障害、行動、興味および活動の、限局され反復的で常同的な様式があり、社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の臨床的な著しい障害を起こしている。今回の AAT の目的は、犬との触れ合い活動を通して、アスペルガー症候群の患児らのソーシャルスキルの向上や心理、行動側面に対する効果を症状変化をもとに研究を行なった。ソーシャルスキルの向上とは、アスペルガー症候群の患児らが社会の中で生活していくための技術、社会における様々な状況の中で自分がどのように行動すればよいのかを習得することである。

### 【方法】

今回、活動に参加するセラピー犬は雑種(ミックス)で、性別：♂、年齢：3 歳、毛色：黒、体の大きさ：小型～中型であり、何年かかけて、基本的トレーニングが完成した犬であり。人に対して、吼えたり、興奮することはなく、人の指示に従うことができる。

患児は 5 人で、年齢は 11 歳から 16 歳であり、アスペルガー症候群と診断されている。ソーシャルスキルの向上を目的としたプログラムを組み、活動を行った。プログラムの内容は、2 週間に 1 回の割合で 6 ヶ月間とし、計 12 回行う。

- ①・②→今後の活動を行なうにあたり、主に犬の扱い方について実際に犬と触れ合いながら学習する。ここでは犬に触ることから開始して、犬に対して簡単な指示を出し、それに従わせる。最後に犬を自分の左側につけて室内を一緒に歩く。①・②でこれらのことができるようになればこちら側の指定したコースを散歩してもらう。
- ③・④→①・②の活動を復習した後、麻布大学内の地図を配布し、自分の散歩するコースを考えて、地図に記入する。この地図を見ながらコースに沿って散歩する。
- ⑤・⑥→①・②の活動を復習した後、犬に関する絵・文書などを書いてもらい、自分の犬に対する感情を表現する。
- ⑦・⑧→いくつかの課題を与えそれに従って散歩してもらう。学校内にいくつかのチェックポイントを設置し、その場所にいる人に次の進路を尋ねスタート地点まで帰る。
- ⑨・⑩→普段とは異なった場所で活動を行なう。異なる環境でも同様の活動が行な

えるようになることを目的とする。

⑪・⑫→これまで行ってきたプログラムの中から参加者本人に選択してもらいそのプログラムを行う。

プログラムの目的と評価内容について以下にまとめる

回数	目的	評価
①～②	犬と触れ合う中で犬との接し方を学び、犬に慣れもらう。犬が苦手な子供に関しては犬に触れることから始めていく。	犬が苦手である子供に関しては犬に触れるようになること。それ以外の子供に関しては上述した3項目ができるようになること。
③～④	自主的に経路を作成し、参加者本人が主体的に散歩を行う。	散歩コースを作成し、それに基づいて散歩することができる。
⑤～⑥	犬に関して参加者本人の持つイメージを絵や文書などにより表現する。自分の感情を何らかの方法で表現する。	参加者それぞれの方法で犬に関して表現できる。
⑦～⑧	課題を自分で解き、わからない所を自分で聞けるようになる。自らコミュニケーションをとるトレーニングを行なう。	課題を解くことができる。自分から他人に意見を求めることができる。
⑨～⑩	異なった環境の下でも活動を行なうことができるようになる。異なった環境下に適応できるようになる。	環境が異なっても、同じように活動を行なうことができる。
⑪～⑫	自分で活動の計画を立てて、それに沿って活動する能力の向上。	計画を立て、それに従って活動することができる。

## 【結果】

AATに伴う患児らのソーシャルスキルの向上について

患児らについては、共通してみられる変化は、ソーシャルスキルにおける他人に対するコミュニケーション能力の改善であった。これは犬と触れ合うことがすべての要因ではないが、動物介在療法（AAT）に参加したことは一要因になったと考えられた。犬の扱いに慣れ、活動範囲も拡大し、患児らは犬に対しても愛着というアスペルガー症候群の子供が表現しにくいものが芽生えてきた。患児はお互いに表現の仕方は違うが、生き物を扱うということに対して何らかの反応を示した。1人で遊んでいることが多かったが患児が、スタッフと積極的にコミュニケーションをとるようになった例もあった。犬に対して過剰な恐怖心を持っていた患児が、少なくとも今回のセラピー犬に対しては恐怖心がなくなりうまく扱え、犬を扱うことが楽しめるようになった。また、話す声が明瞭で大きくなり、コミュニケーション能力に改善がみられていると考えられた。以上の様に、アスペルガー症候群の患児に対して、動物介在療法（Animal・Assisted Therapy）は患児らのコミュニケーションの改善、ソーシャルスキルの向上に役立っているように考えられた。

### 3. 不登校児童における音楽療法

【分担研究者】 坪井康次

【研究協力者】 村井靖児、篠田知璋、丸山忠璋

【要旨】 不登校児童に対し再登校へむけて音楽療法の与える効果について検討した。音楽療法は母子間を始めとした対人関係の改善が認められた。治療を行うものにとっても治療に対するモチベーションの改善や治療上のストレスの軽減効果が認められた。今後も音楽療法の持つ可能性についてさらに検討が必要である。

【緒言】 不登校児童など自宅、自室にひきこもる青少年の増加は社会的問題となっている。一方で「引きこもり」という対象像や治療技法は明確化されたとは言い難い。このような状況のなかで治療関係を構築していく手だてや、母子関係の改善をはかる手法としての音楽療法の持つ可能性を報告したい。

#### 【方法】

全国57カ所に設置されている児童自立支援施設において音楽を指導する職員に、35項目のアンケート解答を依頼。その結果を集計し分析を試みた。アンケートの内容は①指導形態②指導内容③児童の反応④音楽療法に関して⑤指導者の意識にわけ無記名で解答を依頼した。(堀江道代)

2年間不登校状態で母親に暴力をふるうようになった10歳男子及びその母親を対象に週1回45分の個人セッションを行った(29回にて終了)。活動内容はドラム演奏、プレイソング、動作遊び、言葉遊び、歌唱、合奏、身体運動とし、松井紀和の「発達理論」を基盤としたアプローチ及び自作評価表にておこなった。(三村裕子)

10代～30代の引きこもる青少年に、週1回1時間訪問による音楽療法を実施した。治療構造は生活形態に大きく左右されるため、携行適応性の高い電子機器が効を奏した。内容は話しにくさを察しつつ、生活歴からなじみの音楽(うた)を試聴、傾聴、演奏した。(渡辺健)

ウイリアムズ症候群の13歳女子に9ヶ月間、1回30分の個人セッションを行った(開始時月2回、ピアノレッスン方式開始時から週1回)。(矢野真澄)

運動会など学校全体の行事の前には腹痛を訴え投稿することができない小学2年の女子を対象とした。1年間、週1回30分～40分のセッションにおいて、母子で歌える季節の歌などを使い、歌唱、手遊び、リズム打ち、音名唱などを行い、他に、絵描き歌、鍵盤奏なども適宜とりあげた。(尾形晃子ら)

## 【結果】

①指導形態では施設独自、分校・分教場方式など様々であり②指導内容では児童が好む具体的な楽曲が把握できた。③児童の反応では日常の児童の様子や隠された側面が浮き彫りにされ、④音楽療法に関しては指導者全般に研修会参加率、関連書籍の購読率は低い、児童に対しては音楽療法の可能性を充分感じていることを把握した。⑤指導者の意識は、児童自立支援施設に勤務することに、ほぼ全員が困難だがやりがいがある・大変楽しいと解答した。(堀江道代)

I期(S1~9):太鼓が破れる程力を発散し、怒りの感情のコントロールがなされた。II期(S10~17):他者と協調しようとする姿勢が見られ母子関係が改善された。III期(S18~29):男子の間で流行しているゲームで、皆と遊び、再登校が確立した。(三村裕子)

社会的見捨てられ感や置き去り感に葛藤している対象者は、メディアに敏感で、特に流行曲の「うたことば」(歌詞)の意味内容に反応共感していた。音楽による時間の共有が深まり緊張が和らぐと、「うた」をめぐる話し言葉が展開されるようになった。(渡辺健)

S1~13では対象者の気持ちに寄り添いながらのセッションを通して、家族間の葛藤をセラピストに話すようになり、安心できる場所の提供という目標は達成できた。健常児との交流のなかでピアノのレッスンを再開したいという意欲もでて、レッスン方式でセッションをした。テストへのプレッシャーなどから体調を崩し、不登校の徴候があったが、学校への働きかけや、自由ノートに想いを表出する活動をする一方で、音楽療法ではレッスン方式の枠組みを緩めて、癒しの場、母子分離の場として活用し、母子両者の心の安定をはかった。「お母さんと音楽は心の安らぎ、生き甲斐」との発言もみられ、不登校の兆しを早期に回避できた。(矢野真澄)

1年間のセッションにより以下のことが認められた。①40分間のセッションにおいて集中力が増した。②歌唱を通して、声量が増え、音域が広がり、表現力が豊かになった。③好きな曲を弾いてみせるようになるなど、積極性が増した。④家庭で、母親と歌唱や手遊びに親しむことにより、母子のコミュニケーションが深まり、情緒の安定が認められた。⑤登校をしぶることが減少した。(尾形晃子ら)

## 【考察】

指導状況の困難さにもかかわらず、児童たちの隠れた能力を感じる指導者が多く、また好む楽曲、歌手などが全国共通していることは大変興味深い。(堀江道代)

対象者は「自己統制」の段階で躓いていたが、鬱積していた感情が、音楽療法とともに発散され、次第に母親、Th、友人との調和がみられるようになった。母親、Thを含む三者がともに「大笑いするような活動」を重視したプログラムを設定し、そのことが母親の気持ちを楽しみ、自分自身を振り返ることに繋がった。子供の活動が盛んになるにつれ、母親の心に「ゆとり」が生じ、更には「母性」が蘇り、「音楽の介入による母子関係の改善」が成立した。」対象者は再登校を開始し、ここに

「音楽療法は母性原理に根ざしたものである。」ということが立証されたと考えられる。(三村裕子)

社会的居場所を見失った対象者にとって、時代につながる「うたことば」を音楽に発見することは、見捨てられ感の緩和につながると考えられる。同時代を同世代と同一空間に過ごし、コミュニケーションを深化させられない対象者にとって、音楽の中に居場所を見だし「うたう」ことから「話す」自信を回復することは、対人関係の回復につながると考える。(渡辺健)

レッスン方式の枠組み強化が、不登校の兆しの原因の一端となったことが懸念されたが音楽療法の場という安心できる場所が確保されていることは母子にとって有効であった。(矢野真澄)

児童が登校をしぶる背景には、子供の個性化を促す就学前教育の基本方針と、一斉主義的な傾向をもつ小学校での集団的生活との間の隔たりがあると考えられる。このような状況に対して、対象者に合わせることを重視している音楽療法は、児童の緊張感をやわらげ、気持ちの発散の場としても有効であると考えられた。(尾形晃子ら)

#### 【結論】

不登校児童に対して、音楽療法は母子間を始めとした対人関係の改善が認められているという報告が多くみられた。今後も音楽療法の持つ可能性についてさらなる検討が必要であると思われた。

## 表 アンケート項目および集計結果

・Q1 あなたは動物が好きですか？

はい

いいえ

・Q2 どんな動物が好きですか？

犬 猫 鳥 馬 イルカ その他

・Q3 どんな動物が嫌いですか？

犬 猫 鳥 馬 イルカ その他

・Q4 あなたは今までに動物を飼ったことがありますか？

飼ったことがある

飼ったことがない

・Q5 今回の入院・通院中に動物とふれあい、楽しみたいと思ったことがありますか？

思ったことがある

思ったことはない

・Q6 あなたの好きな動物とふれあえば気分転換になると思えますか？

なると思う

なるとは思わない

・Q7 動物とふれあうことで、病気も良くなると思えますか？

思う

思わない

わからない

・Q8 あなたの好きな動物でも病棟の中に入ってきたらいやですか？

入ってきたらいやだ

入ってきてもいやではない

・Q9 あなたが動物と遊ぶ、ふれあうとしたら、あなたの言うことをよくきく、訓練された従順な動物が良いですか？ それとも、訓練を受けていない自由気ままな動物がよいですか？

よく言うことをきく訓練された動物がいい

特に訓練されていない、自由気ままな動物がいい

・Q10 こうした治療のために動物を使うことは、動物にとっては、かわいそうなことだと思いますか。

動物がかわいそうだと思う

問題はないと思う

わからない

表 アンケート項目および集計結果 (続)

---

・Q11 犬のような動きをするアイボというロボットをしていますか？

知っている

知らない

---

・Q12 犬のようなロボットでも気にいれば、ふれあうと気分転換になるとおもいますか？

気分転換になると思う

気分転換になると思わない

見てみないとわからない

---

・Q13 はじめて病気になってから、どれ位になりますか？

1年以下

1年～3年

3年～5年

5年～10年

10年以上

---

・Q14 性別を教えてください。

男

女

---

・Q15 年齢を教えてください。

\_\_\_\_\_歳

---

・Q16 動物と治療について、思うことがあれば、自由に書いてください。

---

表 アンケート項目および集計結果（続）

Q 1 動物が好きですか？

人数（％）

性別	はい	いいえ	無回答
男	205 (47.7)	39 (9.1)	0 (0.0)
女	147 (34.2)	34 (7.9)	1 (0.2)
不明	3 (0.7)	1 (0.2)	0 (0.0)
計	355 (82.6)	74 (17.2)	1 (0.2)

Q 2 どんな動物が好きですか？（犬）

人数（％）

性別	1. 犬	2. 猫	3. 鳥	4. 馬	5. イルカ	6. その他
男	163 (37.9)	80 (18.6)	77 (17.9)	47 (10.9)	48 (11.2)	23 (5.3)
女	114 (26.5)	93 (21.6)	58 (13.5)	34 (7.9)	36 (8.4)	29 (6.7)
不明	1 (0.2)	4 (0.9)	2 (0.5)	2 (0.5)	1 (0.2)	0 (0.0)
総計	278 (64.7)	177 (41.2)	137 (31.9)	83 (19.3)	85 (19.8)	52 (12.1)

Q 3 どんな動物が嫌いですか？（犬）

人数（％）

性別	1. 犬	2. 猫	3. 鳥	4. 馬	5. イルカ	6. その他
男	38 (8.8)	58 (13.5)	26 (6.0)	35 (8.1)	25 (5.8)	58 (13.5)
女	33 (7.7)	44 (10.2)	26 (6.0)	21 (4.9)	17 (4.0)	57 (13.3)
不明	0 (0.0)	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
総計	71 (16.5)	103 (24.0)	52 (12.1)	56 (13.0)	42 (9.8)	115 (26.7)

表 アンケート項目および集計結果 (続)

Q 4 今までに動物を飼ったことがありますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	無回答
男	209 (48.6)	32 (7.4)	3 (0.7)
女	149 (34.7)	32 (7.4)	1 (0.2)
不明	1 (0.2)	2 (0.5)	1 (0.2)
総計	359 (83.5)	66 (15.3)	5 (1.2)

Q 5 入院 (治療) 中に動物と触れ合いたいと思いましたが？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	無回答
男	136 (31.6)	107 (24.9)	1 (0.2)
女	101 (23.5)	78 (18.1)	3 (0.7)
不明	3 (0.7)	0 (0.0)	1 (0.2)
総計	240 (55.8)	185 (43.0)	5 (1.2)

Q 6 動物と触れ合うと気分転換になりますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	無回答
男	186 (43.3)	53 (12.3)	5 (1.2)
女	137 (31.9)	42 (9.8)	3 (0.7)
不明	4 (0.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
総計	327 (76.0)	95 (22.1)	8 (1.9)

表 アンケート項目および集計結果 (続)

Q 7 動物と触れ合うと病気も良くなると思いますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	わからない	無回答
男	103 (24.0)	45 (10.5)	93 (21.6)	3 (0.7)
女	100 (23.3)	26 (6.0)	54 (12.6)	2 (0.5)
不明	2 (0.5)	0 (0.0)	1 (0.2)	1 (0.2)
総計	205 (47.7)	71 (16.5)	148 (34.4)	6 (1.4)

Q 8 動物が病棟に入るのは嫌ですか？

人数 (%)

性別	嫌だ	嫌でない	無回答
男	111 (25.8)	128 (29.8)	5 (1.2)
女	83 (19.3)	91 (21.2)	8 (1.9)
不明	1 (0.2)	3 (0.7)	0 (0.0)
総計	195 (45.3)	222 (51.6)	13 (3.0)

Q 9 訓練された動物が良いですか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	無回答
男	161 (37.4)	71 (16.5)	12 (2.8)
女	120 (27.9)	54 (12.6)	8 (1.9)
不明	1 (0.2)	2 (0.5)	1 (0.2)
総計	282 (65.6)	127 (29.5)	21 (4.9)

表 アンケート項目および集計結果 (続)

Q10 動物がかわいそうだと思いますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	わからない	無回答
男	81 (18.8)	92 (21.4)	67 (15.6)	4 (0.9)
女	75 (17.4)	60 (14.0)	45 (10.5)	2 (0.5)
不明	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.5)	0 (0.0)
総計	157 (36.5)	153 (35.6)	114 (26.5)	6 (1.4)

Q11 アイボを知っていますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	無回答
男	109 (25.3)	134 (31.2)	1 (0.2)
女	64 (14.9)	116 (27.0)	2 (0.5)
不明	0 (0.0)	1 (0.2)	3 (0.7)
総計	173 (40.2)	251 (58.4)	6 (1.4)

Q12 ロボットでも気分転換になると思いますか？

人数 (%)

性別	はい	いいえ	わからない	無回答
男	91 (21.2)	64 (14.9)	86 (20.0)	3 (0.7)
女	82 (19.1)	38 (8.8)	58 (13.5)	4 (0.9)
不明	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (0.7)
総計	174 (40.5)	102 (23.7)	144 (33.5)	10 (2.3)